

まちづくり事例研究－調布市民放送局の場合－

NPO法人調布市民放送局
副代表 長友 真理子

はじめに

昨年10月31日にユウカリが丘で行われた「住民による住民のための情報発信」というセミナーで「住民による地域情報発信の可能性」というテーマで講師として登壇させて頂いたことがきっかけで今回のお話しをお受けいたしました。その時は30分位で調布市民放送局の情報発信の活動をお話ししましたが、今日はもう少し深く多方面にお話をさせて頂きたいと考えております。

1. 「私って誰」？

今回のお話しをお引き受けした時、何をお伝えしたら良いのか考える上で、自分の今までの半生を振り返って見ました。そんな中で自分でも気が付かなかった、幾つかの新しい発見がありました。そして今までの人生の中で現在まで私がしている事は一貫している事に気が付きました。その事を含め私って誰？という所から話をさせて頂きます。私は昭和28年生れ、この年は皆さんご存知のようにテレビ放送が始まった年です。私が現在ケーブルテレビを通じて情報発信をしているのは何か縁があるのかなと感じております。1964年東京オリンピックが行われた時、私は小学校5年生でした。私が住んでおります調布市は、東京多摩地区で唯一2020年東京オリンピック・パラリンピックの複数競技開催地に決まりました。

昭和28年9月17日誕生

昭和51年 学習院大学法学部政治学科卒業
学習院大学学生放送局 (GSRS) 所属

昭和51年～57年 株式会社 社会工学研究所 勤務

昭和57年 結婚

昭和60年～63年 ベルギー王国ブリュッセル在住

平成10年～13年 フランス共和国パリ在住

平成14年～現在 調布市内地域活動に従事

平成22年～ 関東ICT推進NPO連絡協議会幹事
*夫1人子供1男2女

高校生の時私は放送部に入りました。この時の事が現在の調布市民放送局の活動に繋がっているのかなと思います。

一方高校3年生の時は、まだ学園紛争が華やかだった時代でした。私の学校（学習院女子高等科）は早稲田の本部と理工学部のちょうど中間の地点にありました。授業中にシュプレヒコールや上空からのヘリコプターからの騒音が聞こえる中で、何も無かったかの如く淡々と授業受けている自分に疑問を感じました。外で、社会では何が起きているのか知りたくて、大学の学部は、法学部政治学科を選びましたが当時女性はまだ少数でした。

大学でも放送部に入り、既に下火にはなっていた学園紛争や事件を取材し、原稿を書いてニュースとして学内に放送したりしていました。この経験から調布で市民放送局を立ち上げた訳ではありませんが、最近になって学生時代と同じような事をしていたのだと改めて気付かされました。

大学3年の時に都知事選挙があり、持ち前の好奇心から石原氏（当時は落選）の選挙事務所の手伝いをしました。それが縁で、大学4年生の時、香山健一教授のゼミにも入りました。卒業後も縁が繋がり、牛尾治朗氏（元経済同友会代表幹事）が社長、黒川紀章氏を所長とする日本で2番目に出来たシンクタンク「社会工学研究所」に入り6年間勤務しました。この6年間で私は素晴らしい人に出会い、本当に多くの事を学ぶことができました。それぞれの方に感謝しても感謝しきれない位、お世話になりました。その後結婚して仕事をやめるにあたり、そのご恩をどうしたら返せるのか考えました。その結果、今まで私が受けた教えや経験を活かして、女性・生活者の視点から地域の中で恩を返して行きたいと思うようになりました。

結婚した当初は子育て中心の生活をしていましたが、将来、地域で活動したいと一貫して思っていました。そこが今の地域で活動する事に繋がってきたのではと思っております。

夫がJETROの職員だった関係で、その後ベルギーのブリュッセルに行き、そこで次女を出産しました。出産後の対応、おむつの扱い等全く違い、日本との子育ての違いに大きなカルチャーショックを受けました。

次女が小学校に入学をしたことをきっかけに専門学校の非常勤講師をしたりした後、夫の関係で再びパリに行くこととなりました。そこでたまたまですがパリの日本人学校のPTA会長をお引き受けする事となりました。当時パリ日本人学校は財政的に立ち行かない位の危機的状況にありました。そんな事とは全く知らずPTA会長をお引き受けしたのですが、これからパリに来る日本人の子ども達のためにも、今学校を潰すわけにはいかない、と当時のPTAのお母さん達が立ち上がりました。それぞれのご主人達を動かし、学校を動かし、最終的には日本人学校の責任者である文科省を動かし、怒涛のような1年間を過ごすことになりました。お蔭様で皆様のご協力もあり、日本人学校の抱える課題を解決する事ができ、現在に至っております。この時も同じ目的の為に一緒に活動する喜びを味わうという本当に貴重な経験をさせていただきました。

平成14年に帰国しましたが、当時ある方から「調布市の市議会を見てほしい」とのお誘いがありました。実際見てみると、地域の中で問題が山積していることがわかりました。市政に対して批判をするだけでなく、市民自ら解決するためには行動しなければならないと強く感じました。

その後、パリから帰国した主人を市長候補に立てようという話が一気に纏まりました。地域に全く縁がない私達は、現職が強い選挙で勝ち目は無いと言われていたのですが、最終的に僅差で勝たせていただき現在に至っております。

先程お話ししましたように、結婚当初より私は地域の中で活動しようと思っておりましたが、主人が市長になることは全くの想定外でした。夫が市長である事は、私にとっては大変やり難い事でした。市長の妻という立場は、市民の中から選ばれた訳ではなく、何も権限もありません。まして市役所の情報が私から漏れる事があってはならないと思っておりました。私達は家族の話以外には話しをしなくなりました。

長友が市長職に就いてからも、私は、地域の中で何ができるか思考する中で、これもたまたまなのですが、市内の電気通信大学で市民向けの情報講座を無料で開催されている事を知り、勉強を兼ねて参加する事になりました。それが、現在行っている市民の情報発信活動をする事になったきっかけです。

私達は、調布に縁があったわけではなかったため、ほとんど地元の情報を知りませんでした。しかし私は、情報発信活動をする事によって地域の様々な事を知る事ができました。

これから説明させていただきますが、メディア活動は、私でなくても誰がやっても情報を得る事ができます。地域の情報を発信するためには、色々取材し、勉強しなければなりません。そうすると地域の課題が何なのかわかってきます。また、何故そういう課題が生まれたのかの理由もわかってきます。地域を良くするためには、こういう市民の活動も必要ではないかと考えております。

長々お話ししましたが、ここまでお話ししないと私が何故こんな活動をしているのかがお分かり頂けないのではと思っておりましたので、少々お時間をいただきました。

2. 地域市民メディア「NPO法人市民放送局」の事例報告

(1) 調布市をご存じですか？

NHKの朝ドラ「ゲゲゲの女房」放送以来調布市を知って下さる方が増えていますが、簡単に調布市がどういう所か説明させていただきます。

東京都のほぼ中央、新宿から特急で15分の距離にあります。都心に近い距離にあり、現在人口228,966人(2016.9.1現在)、自然が多く残っています。なぜ自然が残っているかといいますと、バブルの時、地価が高騰し過ぎたことと、多摩川の流域では古代からの遺跡が多く残っていて、開発が進まなかったという背景もあると聞いています。

北に古刹深大寺、東には仙川駅、安藤忠雄ストリートがあります。南には多摩川が流れており、毎年調布の花火大会が行われています。昔、東洋のハリウッドと呼ばれ、映画関係者が多い地域です。現在は日活と大映の撮影所があります。野川の桜ライトアップも最近では春の風物詩としてよく知られています。昨年亡くなられましたが、漫画家の水木しげる氏も調布に住まわれていました。

これからの調布市は2019年ラグビーのワールドカップの開会式・開幕戦の開催地になりました。国立競技場がそのような状態になり、調布にある東京スタジアムで行う事となりました。東京2020年オリンピック・パラリンピックではこの競技場（東京スタジアム）で7人制ラグビー、サッカー、近代五種、現在建設中の「武蔵野の森総合スポーツ施設」（仮称）でバトミントン、近代5種（フェンシング）、車いすバスケットボールが行われる予定になっております。

（2）NPO法人調布市民放送局とは？

現在活動している人は約30名、2011年特定非営利活動法人になりました。目的は「市民による市民のための放送局です」。地元の情報を市民自ら企画・制作して情報発信している団体です。マスメディアで流されている情報は多くの方が知っていますが、地域で素晴らしい人がいても、素晴らしい活動があってもマスメディアで取り上げられることは殆どありません。それならば自分達で取材して地域で流そうというのがそもそもの考えでした。これだけ情報過多の時代に「皆さん地域の情報をどれだけ知っていらっしゃるでしょうか？」

（3）調布市民放送局の経緯

「NPO法人調布市民放送局の歩み（2016年4月放送）」ビデオで説明

- * 2002年情報化の急速な流れの中、調布市では「調布市地域情報化基本計画」を策定する事となりました。市民参加による基本計画づくりがスタートしました。
- * 2003年ここに参加した女性を中心に「地域の人を紹介するインタビュー番組」がスタートしました。市民が放送媒体を通じて情報を発信することが珍しかった時、新聞6社に記事が掲載され大変注目を集めました。
- * 2006年4月にはJ：COMにて「調布CATCH」の番組がスタート、2007年には調布にて「第1回市民テレビフォーラムを開催」
- * 2008年には首都圏の3つの特徴ある市民テレビ局が集まり、市民テレビ局フォーラム2008を開催しました。
- * 2010年からは総務省関東総合通信局 関東ICT推進NPO連絡協議会の東京の幹事に就任し活動しています。
- * 2011年4月25日 NPO法人として認可されました。
- * 2013年総務省関東総合通信局より表彰されました。
- * 2014年には「ICT地域防災情報支援システム調布フィールド試験」の実況中継・映像記録作成を担当しました。
- * 2015年10月には地域連携フォーラム「愛で地域と世界をつなぐ」を開催しました。

<現在までの特徴的な制作番組>

- * 調布市では京王線連続立体交差事業が行われ、街が大きくかわろうとしていました。私たちは工事の様態を10回にわたり放送しました。
- * 2013年にはスポーツ祭東京2013（国体）の開・閉会式が調布で行われました。サッカー成年男子3位決定戦のライブ放送を実施し、すべての調布の選手の映像を撮影・放送しました。

このビデオの説明で私たちのこれまでの活動の経緯等はお解りいただけたと思いますが、現在、市民がボランティアで行っている活動のため、無理をしないで、一步一步地道に活動をしています。

(4) 調布市民放送局の活動内容紹介

活動内容

- ①「調布CATCH」→調布の人・もの・事を映像にて紹介。J:COMにて放送。
- ②「調布わくわくステーション」→調布に関係する人のインタビュー番組。調布FMにて放送。
- ③「調布市民放送局ニュース」→毎月1日発行。
- ④メールマガジン配信→毎月1日発行。
- ⑤インターネット配信→随時更新
- ⑥Facebook支局→随時更新
- ⑦その他（上映会、講習会、フォーラム開催等）。

毎月これだけの活動量をこなすのは正直大変です。しかし、毎回新しい発見があり、勉強になり、その都度新鮮な驚きを感じる活動です。

私たちの活動はサークル的、同好会的な自分たちが好きなことをしようと集まってしている団体ではありません。調布市地域情報化基本計画から生まれた活動です。一方で急速な情報化の進歩のため、この会を立ち上げた時と今では状況が全く違います。変わり方が激しいものですから、変化に対応するのが大変です。社会環境の変化が活動に大きく影響するのも特徴の一つです。常に技術を含めた学習が必要です。又私たちのような地域にこだわった情報発信という活動はモデルがなく、常にトライ＝挑戦している活動と言えらると思います。

10数年間地域で調布市民放送局の活動をしてきて一番大切と感じるのは、「地域の信頼」です。情報の中身の信頼性も勿論ですが、それと共に活動している人たちの信頼・組織の信頼が大切です。これが崩れてしまうと、途端に誰も見てくれないばかりか、放送している情報自体も信じてもらえなくなります。この点には当初から相当配慮・注意しながら行いました。例えば、どういう番組を企画するか、ゲストとして呼ぶ方に偏りが無いかな等は、長い時間をかけ、メンバーが議論をしながら進めてきました。現在まで700～800の番組を作りましたが、あらゆる角度からバランスよく取り上げるように心がけました。

私達はそもそも放送局を持っているわけではなく、J:COMと調布FMの枠を無料で使用させて貰っております。通常であれば、枠を買うわけですが地元メディア活動の為に枠を頂いておりますのでスポンサーをつける事はありません。また、特定の団体の宣伝になるようなことは基本的には出来ません。

それとインターネットの時代に取ってJ:COMとコミュニティFMとで放送しているのかというと、前にも言いましたが、調布市民放送局は何もない所から出発しておりますので、情報の信頼のためです。どれだけ視聴者がいるかと言うと、ケーブルテレビもコミュニティFMもあまり見られていないのかもしれませんが。しかし放送法と言うものがある中で、これをクリアした番組を作っている、メディア・リテラシーをきちんとクリアできていると言う事を伝えたかったからです。信頼できる放送ですよと訴えたかったため、手段としてJ:COMとFMの枠を使わせて頂いております。

将来、情報媒体はこれだけではないだろうと思っておりますが、現在は4つの媒体（ケーブルテレビ、コミュニティFM、紙媒体、インターネット）で情報配信しています。

映像番組を作るのは大変難しいです。著作権とか肖像権とか個人情報保護法とかいろいろな事に配慮する必要があります。建物等映るものについては全て許可を得ています。ただ何もわからず撮っていると言う事はありませんし、できません。撮影方法についてもNHKの放送ガイドラインを使って、それに沿って制作しています。このようななかで作った二つの番組をご覧ください。

(5) 放送番組紹介

(a) 調布市民の歌「わが町調布」（2015年8月放送）

毎日小学校の下校時に流れる歌「わが町調布」をご存知ですか？ 当時誰が作ったか、どの様ないきさつで作られたかも明らかではありませんでした。これをフォローした番組です。

(b) ごみ探索隊～ごみの行方を追って～（2016年8月放送）。

調布市が毎年夏休みに、小学生を対象に、ごみの減量と分別の大切さを考えることを目的に「ごみ探索隊」を募集しています。この活動に同行・撮影し、市民一人一人がゴミの行方に関心を持たなければと思いつきました。最終処分場は今までメディアの取材を受け入れた事がなかったのですが、何回も交渉した結果撮影させていただきました。問題提起やドキュメンタリータッチの番組ではありませんが、事実をまず正確に伝える事が重要ではないかと考え、このような作り方をしています。

(6) 調布市民放送局 誕生のいきさつ

地域の事を知る事ができ、地域にも貢献できてこの活動はとても良い活動だと思います。が、当初地元の方達より言われたことは「お金がないのにそんなことは出来ないよ、どうやってやるの」、これが一般的な意見でした。協力して欲しいとお願いして歩きましたが、なかなか協力は得られませんでした。開設資金はゼロ、TV番組の制作技術・経験はなし。放送局の運営のノウハウはなし、こんな状況でした。情報発信活動してみたいと思った人の多くは地域の中で活動していた人達でした。自分たちの活動を人に伝えたいと集まった人たちでした。何も無かった中で唯一あったのは「市民のネットワーク」だけでした。

2002年、調布市地域情報化基本計画策定委員会が発足、市民参加による基本計画づくりが始まりました。これに参加し、この活動の一環として地域情報をICTを利活用して発信してみようと取り組みました。最初女性だけで地域の人を紹介するインタビュー番組を調布FMで放送する事から始めました。その後、調布ケーブルテレビさんより連絡があり、今だったら市民が映像番組を企画制作して放送できるかもしれないと云うお話を受けました。是非この絶好の機会に実現させたいと地域の中で様々な活動をしているグループに声をかけました。しかし経験者が誰もいませんでした。そこで中央大学の松野良一教授のご指導を仰ぎ作り方を教えてもらい、学生の協力も得て技術を習得しました。

2006年4月、J:COMで番組がようやくスタートしました。その後行ったフォーラムはNHKの首都圏ネットワークで実況中継されたりしました。当時としては非常に斬新で面白かったと思います。現在は、調布の地域情報の映像はマスメディアの方より私たちの方が持っていると思えます。最近でもアベマTVより地域情報の提供依頼を受けたり、水木しげるさんが亡くなった時各放送局は特集を組みましたが、各局から調布市民放送局に連絡がありました。地元にいる市民は地元で何が起きているか分かっています。どこよりも地元の市民の方が自らの情報を持っているので、そこが調布市民放送局の強みだと思います。

しかしここまでに至るまでは、様々なご協力がありました。お話ししましたように映像の作り方について中央大学の松野先生より指導を頂き、J:COMや調布FMからは尺を頂き、情報提供には市民の協力があり、ホームページを置く場所も地元の電気通信大学のサーバーに置かせて頂いた等多くの方に出る協力を少しずつ得て進めました。開局当時の調布市民放送局の運営資金は会員の会費収入、寄付（市内の企業、個人）、企業からの機材提供等で賄い、行政からは補助金助成金は一切受けませんでした。それは私たちの情報は行政情報だけを流すものではなく市民にとって必要な情報を配信したいという気持ちからでした。一方行政情報も市民が知りたい情報であることは事実です。それについては私たち市民の目線で取り上げています。そういったスタンスで活動しておりますので、行政のチェックは一切入っておりません。

また、スポンサーをつけなかったのは、尺をもらっているということもありますが、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」のドラマの中でも紹介されたように、スポンサー側の要請を受けることを望まなかったからです。ただ任意団体ですと、色々と運営上の制約を受けることが分かりましたので、安定的な活動が継続できるようにと2011年4月NPO法人となり、法人格を持つことにしました。

(7) 地域市民メディア活動の特徴と機能

10数年間、情報配信活動をしてきて色々なことを感じておりますが、私達の活動には様々な機能

がある事に気が付きました。

- ①情報集積機能→情報を発信している調布市民放送局自身に情報が集まると言う現象が起こっています。
- ②情報交流機能→地域情報をきめ細かく発信することは、片方向の情報伝達ではなく地域における情報交流の一助になります。
- ③マッチング機能→地域における情報交流の結果として、新たな地域活動や事業を生む可能性を秘めています。
- ④コミュニティの再構築→市民や地域で活動する人たちのニーズを満たす情報は、情報化社会における地域コミュニティの再構築に資することとなります。
- ⑤コーディネート機能→調布市民放送局の取材、制作等をきっかけとして、地域の人と人を結びつけたり、活動と活動を結びつける可能性を有しています。
- ⑥地域情報のアーカイブ機能→日々の情報発信のコンテンツは、それ自体が地域情報の蓄積となります。
- ⑦相乗効果→調布市民放送局の事業と、地域で行われている事業との相乗効果（例えば、郷土博物館の催しなどを紹介する番組は、情報発信の効果と同時に、それにより郷土博物館の事業を知る人が増えると言う相乗効果をもたらす）
- ⑧学習効果→情報発信をするためには、地元を知り、地域の仕組みを知る必要があります、情報発信をする人が先ず自ら地域を勉強することになります。

(8) 私の夢

調布市民放送局の活動をした事で地域のいろいろな事が分かってきました。地域はとても面白いし、地域が抱えていり問題も明確になり解決する手段も分かるようになってきました。日本各地にこの市民放送局が沢山出来て欲しいと思っております。

現在まだ実現していませんが、活動している人がボランティアではなく多少お金を得る事ができるような仕組みにしたいと考えております。継続的・安定的にこの活動が出来るための仕組みづくりに現在奔走しております。役所、地域のあらゆる人・団体と協力して実現出来ればと考えております。

3. 地域の課題と問題解決に向けて

調布市民放送局の活動等を通じて、感じている事があります。現在の地域が抱える大きな問題点の原点は、少子高齢化社会ではないか、それに依ってすべての社会構造が変化してきているのではないかと思います。その変化に対応できない組織や個人が苦しんでいるのではないかと私は感じています。

日本は、何時何処で災害に合うか分かりません。地域がしっかりと支えていないと災害に対応できないのではと危惧します。近年の人間同士が希薄になる都市化とは真逆で、顔が見える関係を作り、住民がお互いに協力できるような地域にならないといけないのではと思います。そのためには情報というキーワードを使って今の地域を変える事こそ大事だと言えます。

(1) 少子社会と高齢者の増加

人口バランスとライフサイクルが大きく変化しています。平均寿命・健康寿命も伸びています。1950年に平均寿命が60歳を超えましたが、現在は80歳を超えています。この20年間で人は何をしたら良いのでしょうか？

私の親は昭和一桁生まれですが、その世代の人達は、子どもを育てあげるまでの人生計画でした。現在は、それが終わった後の人生があります。地域でも、高齢でも元気な方は積極的に何かに取り組んでいらっやいます。子供が育った後は若い人に譲るのではなく働き方を変えて再度社会のために貢献してもいいのではと思っています。「知的で、時間や健康に余裕のある方。今社会はそういう人を求めています！！」と言う事を、今日、出席の皆さん方には是非言いたいと思います。

65歳からの自分の人生設計をもう一度考え直し、第2の人生は地域（自分の足で歩いて行ける範囲内）で、自分の出来ることを自分の経験を活かしながらするのが良いのではと考えます。今私が何百人の方をインタビューして思うのは残念ながら、それぞれの方の経験を地域で活かし切れていないと思います。行政側も街全体もそういう仕組みが出来ていないように思います。

私が今やりたいと思っているのは「ここにこういう人達があります」という事を発信していきたいと考えています。地域では、行政やコミュニティが問題に遭遇して困った時、適切な人に相談するとある程度の事が解決できるのではと思われます。そんな事ができる仕組み作りです。地域資源である人材の活用、それで地域の経済が回る仕組みを作る、これが地域活性化に繋がるのではと考えています。

（2）地域コミュニティの変化

自治会・商工会・商店会等今まであったオールドコミュニティへの参加者は年々減ってきております。一方でニューコミュニティ（サークル、同好会、市民団体等）は年々増えて多くなっています。この人達も地域のために貢献したいと思っている方が多いと感じております。この人達と、一緒になってまちづくりをするには、“情報発信”を通じて人と人、組織と組織を“つなぐ”必要があるのではないか、そんな仕組みを作りたいと思います。

（3）変化に対応出来ていない地域の存在

世の中は、人も組織も時代に合った様に変えて行かなければならないのに、なかなか変化できない組織があります。

一方市民の方の中には、地域の仕組み・ルールを知らない方が多いように感じます。トラブルを起こさず、適切な対応ができるようになると、もっとスムーズに事が進むように感じます。

住民は、多くの方が、自分が住んでいる所が良くなってほしいと思っております。これは共通な願いです。

その為には、私たちがしている情報発信の活動が、仕組みを知る事ができるような機会を作り、示唆できるようになれば良いと思われます。

最後に

本日はこのような発表の機会を与えて頂き、感謝いたします。今回のような話をさせて頂く事によって、自分自身が今何をなすべきかを考えるきっかけにもなっております。最近テレビを見ていると80歳代で活躍されている方を多く見かけます。80歳代でも若く活躍している方を見ると、本当に心強く感じます。私のこれからの人生20年、今まで私を教導いてくださった方へのご恩を返すためにも、私自身が出来る事をしっかりとしていきたいと思っております。

長友真理子（ながとも まりこ）先生のプロフィール

昭和28年9月17日	神奈川県川崎市にて生まれる
昭和47年3月	学習院女子高等科卒業
昭和51年3月	学習院大学法学部政治学科卒業
昭和51年～57年	株式会社 社会工学研究所 勤務
昭和57年2月	結婚
昭和60年～63年	ベルギー王国ブリュッセル在住
平成10年～13年	フランス共和国パリ在住 パリ日本人学校PTA会長 パリ日本人学校経営委員
平成14年～現在	調布市内地域活動に従事 NPO法人調布市民放送局副代表、調布・狛江桜友会世話人
平成22年～	関東ICT推進NPO連絡協議会 東京幹事

「市民メディア活動 現場からの報告 現場からの報告」中央大学出版部 2005年（「みんな de ネット」として執筆に加わる）

調布市地域情報化基本計画～市民の手による e コミュニティづくり～平成16年3月

調布市地域情報化基本計画別冊資料集 平成16年3月

調布市地域情報化推進委員会報告書 平成17年3月 (一部執筆を担当)